

普曜經の周辺

—ある仏伝經の変容過程—

平井宥慶

普曜經圈の原本が Lalitavistara (方广大莊嚴經) と西蔵記は類同的) と相違したであろうことは學者の指摘するところであるが、極めて一致する偈文も存しその異同問題は複雑である。一体に、經典の変遷過程はその經典の編纂に直接間接に携はつた仏教徒たちの思想的信仰的遍歴を物語るものと考えられ、この観点より仏伝經である普曜經の展開過程を検討し、今は特徴的相違を示す成道段につきその構成と変遷における特質を指摘しておきたい。本經をはじめとする仏伝經が多くの仏典を素材として構成されたことは指摘されるが、その経過は必ずしも明瞭とはいえない。本經が大乗的であることはよく論ぜられるが、仏本行集經の跋文に伝える有部所伝の「大莊嚴」との関係もあり、その性格は議論が分れる。今は阿含經と般若經の二方面から検討する。

仏陀の成道内容については議論が少なくない。本經の伝承においても左記の如く異なる。

普曜經の周辺(平井)

階級	① 成四禪行	② 通三十七道行	③ 如意足	④ 天耳智	⑤ 他心智	⑥ 宿命智
① 入四禪		×				
② 天眼智			×			
③ 八聖道				×		
④ 初夜					×	
⑤ 天眼智						×
⑥ 生老病死を思ひ						
⑦ 十二縁起・四諦を思惟						
⑧ 後夜、成道・具足三明						
⑨ 成道(十力・四無所畏)						
⑩ 十八不共法						
⑪ 宿命智						

この比較で明らかなる如く、両者は同本異訳以上の相違であるが、まず①の伝承を見るに、パーリ經典中ほとんど同一の伝承を見出すことができる。

① 變化現法^①所欲如意、不復用^②思身能飛行、能分^③一身作^④百作^⑤乃至^⑥億万無数^⑦復命^⑧為^⑨一。(中略)其身平^⑩立能至^⑪梵天^⑫出沒自在。(④⑤⑥引文略。具体的記述あり)死^⑬此生^⑭彼展轉所趣。

從^⑮上頭^⑯始諸所更身生長老終(中略)或生卑鄙貧賤家者。

パーリ經典 SN. XVI (9) Jhānabhīna Vol. II, pp. 212~4, 南伝二三相應部2・三一一^⑰(引文略)③⑦の經文ほとんど一致、)

漢訳 I 雜阿含經卷四一（二一四二經）^①神通境界・天耳・他心智・

宿命智・生死智・漏尽智・具足住。^②

II 別訳雜阿含經卷六（一一七經）我亦欲入神通等定。能以一身

身作無量身、以無量身還作一身。（中略、同意經文あり）身

至梵天、天眼天耳及他心智宿命漏尽亦復如是。^③

これら諸神力は「仏十力」中に包含せられ、成道して得る

ものとして再説される。以上から圍の成道段がパーリ經典の

傳承の一つと同一の傳承形態にあることが指摘できる。これ

を般若經にみると、小品系般若經にほとんど同一の經文が

見出せる。（引文略）しかも菩薩は漏尽智をもつて衆生に須陀

洹果乃至阿羅漢果辟支仏道を得せしめ、「行般若波羅蜜、以

方便力成就衆生、具足一切種智、得阿耨多羅三藐三菩提、

轉法輪」とい、「衆生斷上分結、故得阿羅漢、是衆生以

辟支仏道故作辟支仏、是衆生行道種智故菩薩」と規定する。

ここに、原始仏教の思想構造が般若思想によるそれに止揚さ

れる論理的立場が明瞭にうちだされ、しかして阿含から般若

へという思想的展開の中で、仏傳經の介在が重大な意味をも

つてくるものと考えられる。

他方、Lv 圍の構成の主体は初中後夜に分る点で、これに類

似する傳承も原始經典中に散見される。但しその場合多くは

初夜—宿命智、中夜—天眼智であり、この傳承に十二緣起説

が合説されることはない。したがってLv 圍の構成は「折衷

的」なものとみられるが、圍型と圍型の傳承が經典中の一つ

の範疇で混説されることはなくそれ／＼別々に定型的に説か

れるので、それは圍の構成の改変というより採用する傳承が

圍と相違したとみた方が自然のようである。全体的にみて十

二緣起と成道の結合は仏傳經の上では一般的であるが、それ

を採用せずに構成する圍は、その成立時点での思想背景に興

味深い問題が予想できる。それには初期大乘經典の成立が大

きな要因をなすと考えられるが、今は圍を中心とする原始經

典と般若經典の密接な関連性の一端を指摘して、經典の受容

と変遷における思想的信仰的解明の糸口とするのみである。

1 千濁竜祥『本生經類の思想史的研究』一〇一頁。

2 Srinoodana P. (音楽発趣品) 中の偈と圍試芸品中の偈(拙論「普曜經の変容」印仏研一八一)。従来圍には圍音楽発趣

品に相当する品がないとされていたが、試芸品一〇を比定して

よいのではないか。

3 ことに仏傳文學は仏教信仰の受容形態を示すとされる(石上

善応「仏伝と仏傳文學」大正大藏經會員通信39号)。

4 塚本啓祥「仏傳の素材と構成」三藏6。

5 Winternitz「インド文學史」T. R. V. Murri; The Central

Philosophy of Buddhism, 々々 Prasannapada 〇引用は Sa-

in-p. の偈文に限る(拙論前掲論文)。

6 大3九三二a, Winternitz は有部との関係に論及する。

7 千濁博士はこれを比定せず(前掲書一〇〇頁)。平川博士は

- 仏伝文学が「部派相互に交流があり、共同の基盤の上に発達した」と論じ(『初期大乘仏教の研究』)、般若経との関係を指摘する(『般若経と六波羅蜜経』印仏研一九一)。讚仏乘なる見解もある(山田竜城『大乘仏教成立論序説』二四六頁)。
- 8 中村元『ゴータマ・ブツダ』一六七頁。詳細に論述す。
- 9 行道禅思品一九(大3五二一c)。
- 10 *vaḍḍya* 本二五〇頁。〔成正覚品二二(大3五九五a)〕。
- 11 中村博士前掲書一七九頁。今は〔圖〕との比較から見る。
- 12 〔圖表①〕の四禅説は瑞応本起經〔圖〕と経訳文一致。〔圖〕のそれは定型四禅説の原型のなものとされる(玉城康四郎『中国仏教思想の形成』第一卷三六〇頁)。修行本起經〔圖〕の四禅説は字句一致するも、記述順序に相違(混乱?)あり。
- 13 大3五二二a、b、同一経文が〔圖(大3四七八a)〕、〔圖(同四七一b)〕にあり。
- 14 漢訳との比較が可能(赤沼智善『漢巴四部阿含互照録』)。他2 SN. XII vol. II, pp. 121~; 同 LI vol. V, pp. 263~; MN. (vol. I, pp. 34~; 同 pp. 69~; 同 pp. 494~; vol. III, pp. 11~; 同 pp. 98~)に同一経文。天眼通の後、漏尽通を得て解脱すると説かれる。
- 15 経番号はとりあえず正蔵による(三枝充憲『雑阿含経の経の数について』宗教研究196号。国訳一切経再版阿含部新解説)。有部所屬とされる(前田恵学『原始仏教聖典の成立史研究』)現存雑阿含経の成立は三、五世紀とされるが、現在形五〇巻本は五、六世紀に成るとされる(花山勝道『雑阿含の現在形成立年代について』印仏研三一)。

普曜経の周辺(平井)

- 16 大2三〇二a、諸神通の具体的記述を欠く。
- 17 法藏道化地部系とされる(水野弘元「別訳雑阿含経について」印仏研一八一)。
- 18 大2四一七a、③のみ具体的記述あり。以上の訳文の相違(原本の相違か?)に經典伝播上の諸問題が想起せられる。
- 19 五、九力に相応。MN. 12 (vol. I, pp. 69~)に③、⑦を説き更に十力四無所畏を説く(十八不共法は不説)。但し十力の配列順序は相違(高原信一『Mahāvastu』にみられる如来の十力と十八不共法』九大哲学年報28)。十力は MN. vol. III, pp. 11~ (dasa pasādanīya dhama 十可喜法) 同 pp. 97~ (dasa' anisatta 十功德・漢訳は十八徳)にもあり。
- 20 但し十八不共法は原始經典中にほとんどみられない(水野弘元「十八不共法の分類」大乘仏教の成立史的研究、高原氏前掲論文)。〔圖〕という不共法は大智度論のいう所謂大乘の十八不共法(大25二五五c)であり(智度論の作者は E. Lamotte 教授によれば四、初に西北インドの有部で出家し大乘に転じた僧という。『大智度論フランス語訳』第三卷。平川博士紹介印仏研一九一)成立につき般若経との関係は看過できず(梶芳光運「阿含経と般若経との比較」インド古典研究)、仏陀觀の展開とも関係する(天野宏英『Dharmakāya』の語義とその変遷』三蔵1920)。ちなみに道行般若経に「般泥洹悉具十種力四無所畏仏十八、是故菩薩般若波羅蜜」大8四二六bとあり。
- 21 光讚経〔圖〕と同じ益法護訳、訳文字句必ずしも一致せず。〔圖〕との訳文一致についてのこれまでの理由は再考の余地あり。〔圖〕行空品(大8一五九b)。放光・大品共にあり。

普曜経の周辺(平井)

- 22 大品般若経一念品 大8三八八a。
- 23 梶芳光運「新興大乘の実践原理」仏教における行の問題。博士は「仏陀の智慧―般若波羅蜜」ととらえる。
- 24 MN. vol. I (pp. 22~; pp. 117~; pp. 182~; pp. 247~; pp. 278~; pp. 347~; pp. 357~; pp. 441~; pp. 482~; pp. 522~), vol. II (pp. 20~; pp. 31~), ここには必ずしも初・中・後夜の語を不出のものもある。
- 25 ㊦では、成道後の禪定中に簡略な記述あり、初転法論に細説される。㊦の編纂者は、縁起説と成道段の結合を重要とは考えていなかったのか。
- 26 中村博士前掲書一八六頁。
- 27 しかみれば、十八不共法が現存Lv㊦にないという理由のみから、㊦の原本にもなかったらうという推論には疑問がある。この型の不共法では古層に属するとも考えられる。
- 28 平川博士は仏伝文学が般若経に先行すとす(前掲論文)。大乘仏教の原初期時代については、初期大乘に対する原始大乘という区分法もあり(静谷正雄「原始大乘と初期大乘」字教学研究202)、「いずれが先行するにせよ、複雑な相互関連性が思われる。経典の成立にともなう伝播変遷については、一面的な追究では真実が満足されない。例えば般若経類に多元的な展開過程があり(梶芳博士『原始般若経の研究』干潟博士『Suvikranta-vikāmi-Paripiccha Prañāpāramitā-Sūtra』Table V) 法華経に「複雑きわまる増広改変削定」あり(清田寂雲『Śikṣāsāmnuccaya における法華経の引用文』印仏研十九一)といわれる如くである。

新刊紹介

大地原誠支訳「スシウルタ本集」

B5判 本文八三〇頁
 定価 一〇〇〇円
 発行者 アーユルヴェータ研究会
 申込先 大阪市北区常安町33
 大阪大学医学部衛生学教室内
 アーユルヴェータ研究会

伊東弥恵治原訳

鈴木正夫補訳
K. L. Bhishagrātana 英訳

「ススルタ大医典」

Sushruta Samhita

A5判 本文二九二頁
 定価 三〇〇〇円
 発行者 日本歴史学会